



# 白門板橋

編集発行 中央大学学生会

東京板橋区支部

〒174 板橋区常盤台1-49-9

TEL 3960-7488

1992.3.25 第4号



平成4年新年会

## 学生会(支部)の飛躍を願って

副支部長 栗山 秀男

昭和63年4月24日の設立総会で学生会東京板橋区支部が誕生して四年の月日が経過しました。

その間に年一回ではありませんが「白門板橋」も4号目をむかえることができましたが、これからも支部の順調な発展を支える広報活動をお願いいたしますので、会員各位の忌憚のないご意見をお寄せくだされば幸いです。

「白門会」をつくらうという動きは、昭和55年頃にも、あるいはそれ以前にもあったようですが、こうした先輩方の積み重ねで、母校の百周年という時と、人(準備会のメンバー)が、折角この時機につくるのなら正式な学生会の支部にしたいという熱意から、理工学部の後楽園校舎にあった、学生会本部に学生会費(参万円)を納めた板橋区内在住者を本部の台帳から五人が二日かかりで、一五〇人の方を、抜き出しその名簿をたよりに、今度は電話で、支部結成の要件である百人にお名前を貸して頂く承解を求めるなど、本当に、よい時に、よい仲間と支部結成に情熱を傾けたことを今更のように嬉しく思います。

支部結成以来、6月の総会、1月の新年会にも、70名を超える方々が集い、囲碁同好会、ゴルフ同好会などもスタートしましたし、順調な支部運営ですが、一寸油断をすると、会費の継続がなされず、縮小してしまうケースもあるようですから、支部の活動の輪を更に拡大していくために常に会員増強に努力していくことが大切なことでもあります。

そこで平成三年度は、一人が一人の新入会員を勧誘して支部の大飛躍を願うものであります。区内の未入会の学員の手には、「白門板橋」が届けられ、入会促進に役立てば、広報担当者として大きな喜びともなります。

# 湯河原に秋を訪ねる

## 宴の席順にもひと工夫



恒例の行事となった当支部の秋の旅行会を十一月十六日(出)十七日(回)の一泊二日で行った。回を重ねるごとに参加者も増え、今回は二十九名となった。会員の二割以上が参加したことになり、盛会を喜びあった。現地集合であったが、参加者のうち二十名は新宿発午後一時の小田急ロマンスカーで小田原に向かった。

小田急ロマンスカーではビールを売っていないことを知っている一行は、乗車前に買い込む。水割りも割高なことを承知しており、ウイスキーを持ち込み、アイスティーで割って飲むチャッカリ組もいて、車中は和やかな雰囲気包まれた。

小田原で下車した一行は、小田原城に向かう。折しも菊祭が行われており、目を楽しませてくれた。

城内では長年にわたり、小田原城主を続けた大久保一族の記念展が行われており、いつもより、見応えのある感があった。見学を終えた一行は小田原駅から湯河原駅に向かった。目指すは今宵の宿である日本新聞協会の湯河原寮、定刻の四時に到着した。

既に到着している者もあり、早々に温泉につかり、小田原城の階段の上り降りて疲れた足を癒した。

定刻の六時より宴会に入った。席

順は抽選で決められていた。それは、到着した時に引いた番号で既に決まっていた部屋割り番号と同じで、座れば同室の者が並ぶよう一連番号になっていた。

支部長は正面近くの席を引くよう配慮するが、他はみな平等でクジ任せとなる。この方法が顔見知り同士がかたまたま、年齢差を超えて懇親を深められることに役立っている。

宴会は例によって盛り上がり、カラオケ大会となる。そして翌朝……

朝食後有志がまとまり、近くの名所、旧跡を訪ねた。鉱物学者の櫻井欽一博士が「湯河原沸石」を発見した不動滝の滝壺を関心をもって見物したりした。

昭和五年にこの滝壺から、将棋の駒の形をした無色透明の結晶体を採取した。東大の施設を借りて石の確定を行い、「湯河原沸石」と名付けた。沸石とはゼオライトと称し、含水量が多く、加熱すれば連続的に脱水、沸騰して膨れる特性がある。冷却すれば元に戻り、資源的には吸着剤として利用されている。

こうしたアカデミックな話題もあり、湯河原の秋をゆっくり堪能して帰途についた。

(武内崇泰)